赤坂城の謀略

国枝史郎

青空文庫

一

（これは駄目だ）

と正成（まさしげ）は思った。

（兵糧が尽き水も尽きた。それに人数は僅か五百余人だ。然るに寄手（よせて）の勢と来ては、二十万人に余るだろう。それも笠置を落城させて、意気軒昂たる者共だ。しかも長期の策を執（と）り、この城を遠征めにしようとしている。とうてい籠城は覚束ない）

そこで、正成は将卒をあつめ、しみじみとした口調で申し渡した。

「この間は数箇度（すかど）の合戦に打ち勝ち、敵を亡ぼすこと数を知らず、正成くれぐれも有難く思うぞ。が、敵大勢なれば物の数ともせず、囲みを解いて去るべくも見えぬ。然るに城中はすでに食尽き、援（え）兵（んぺい）の来る望みもない。……元来天下の衆に先立ち、草創（そうそう）の功を志す以上、節に当り義に臨んでは、命を惜（おし）むべきではない。とはいえ事に臨んで恐れ、謀（はかりごと）を好んで為すは勇士の為すところと、既に孔夫子も申しておる。されば暫くこの城を落ちて、正成自害したる態になし、敵の耳目を一時眩まそうと思う。……正成自害したりと思わば、関東勢さだめて喜びをなし、下向するに相違ない。下らば正成打って出で、また上らば山野にかくれ、四五回東国勢を悩まさんか、彼等といえども退屈するであろう。この時を

以て敵を殲滅するこそ妙策！」

これを聞くと将卒共はしばらくの間は、言葉も出さず黙っていたが、やがて口々に云い出した。

「君公の謀計にござりまする。粗略あろうとは存じられませぬ」

「早々御落去なさりませ」

「再挙の時こそ待ち遠しゅうござりまする」

そういう将卒の顔には、何等の憂の影もなかった。

我等が信ずる多門兵衛様が――日本の孔明、張良が、城を開こうとするのである。開くべき筋があればこそ、こうして城を開くのであって、尋常一様の落城ではない。――という考えが

あるからであった。

（では）

と正成は決心し、城の落ちる日を心待ちに待った。

その間に正成は士卒を督し、城中に大なる穴を掘らせ、堀の中にて討たれた死人の中、二三十人ばかりを持ち来たしその穴の中へ埋没（まいぼつ）させ、その上に炭薪（すみきぎ）を積み重ねさせた。

と、幸いにもその翌々日、風雨はげしく荒れた。

（時こそ来たれり）

と正成は思い、この赤坂城にそれ以前から、お籠（こも）りあそばされた護良親王様（もりながしんのうさま）を、まず第一に落し参らせ、つづいて将卒を落しやり、火かくる者一人をとどめ置き、舎弟の七郎正季（まさすえ）や、和

田正遠等を従えて、自身も蓑笠（みのかさ）に身をやつし、ひそかに城を忍（しの）び出た。

それとも知らない寄手の勢は、陣屋陣屋の戸をとざし、この吹降りには城兵といえども、よもや夜討などかけまいと、安心しきって眠っていた。

と、正成たちは忍びやかに、寄手の陣屋の前を通り、千早の方へ潜行した。

「誰だ！」

と突然声がかかった。

寄手の大将長崎四郎左衛門尉（しろうざえもんのじょう）、この人の陣屋の厩（うまや）の前に、さしかかった時であった。

流石（さすが）に正成もハッとしたが、
「これは大将御内の者でござるが、道に踏み迷うてかくの通り」
と、早速に云い放して足を早めた。
「怪しい曲者」
「射て、討ちとれ！」
声に応じて弦鳴（つるな）りがし、正成の左臂に矢があたった。
（南無三宝）
と正成は思った。
が、不思議にも矢が立っていない。
（はてな？）
と思いながら数町走り、そこで初めて臂を調べてみた。

日頃信じて読誦（どくじゅ）し奉る、観音経を入れた守袋に、矢の立った痕（あと）があらわれていた。

（神仏の加護）

と正成は思った。

（神の界に属しまつる宮方に、お味方仕るこの正成に、神仏の加護あるは必定か、それにいたしても忝（かたじ）けなし）

こう思わざるを得なかった。

二十町あまりも落ちのびた時、今まで籠城していた赤坂城に――寄手の関東勢二十余万人を、釣塀（つりべい）、投大木、熱湯かけで、防ぎ苦しめた赤坂城に、焔（ほのお）が高く上ったのが見えた。

（穴の中の死骸の焼けたのを見て、正成自害したと思うであろう

よ）

二

一里あまりも落ちのびた時、行手に数人の人影が見え、

「多門兵衛か」

と声がかかった。

「これは宮様にござりまするか」

然う、そこにお立ちになられたは、いつか山伏風に身をやつされ、その上を蓑笠で蔽（おお）いあそばされた、大塔宮護良親王様と、同じ姿の七人の家来、村上彦四郎義光や、平賀三郎や片岡八郎等で

あった。

「御武運ひらきますでござります」

云い云い正成は守袋を取り出し、敵に射かけられた矢が身にあたらず、これにあたったことをお物語りした。

「神仏は神仏を信ずる者にのみ、そのあらたかの加護を与うるものじゃ。……人君（じんくん）に忠節を尽くす者は、その全き同じ至誠を以て、神仏を信じ崇（あが）めるものじゃ」と、親王様には厳（おごそ）かに仰せられた。「正成、そちに神仏の加護ある、当然至極のことと思うぞ」

深い感動が人々の心に、一瞬間産まれ出た。

四辺（あたり）の木立を揺がすものは、なお止まない雨と風とであり、闇夜を赤く染めているものは、燃えている赤坂城の火の光であった。

その火の光を眺めては、さすがに正成の心中にも、感慨が湧かざるを得なかった。

河内(かわち)の国の一豪族の身が、一天万乗の君に見出され、たのむぞよとの御言葉を賜(たま)わった。何んたる一族の光栄であろう。尽忠の誠心を披瀝して、皇恩に御酬い致さねばならぬ。こう、ひたむきに決心した。功名も望まず栄誉も願わず、遠祖橘諸兄公(えんそたちばなのもろえこう)以来の、忠心義胆が血となり涙となって、皇家へ御奉公仕ろうと、そう決心したのであった。

その御奉公の最初の現われが、赤坂築城であり、義兵の旗あげであり、そうして今度の籠城戦であった。

詭計(きけい)のためとは云いながら、その城が燃えているのである。

（ナーニ）

と正成はすぐに思った。

（そうだ一旦は敵に渡す。が、やがて奪回して見せる）

＊

大塔宮様が熊野方面に落ち、楠正成が河内摂津の間に、隠顕出没して再挙を計るべく、赤坂の城をこうして開いたのは、元弘元年十月の、二十一日のことであった。

が、約半年の月日が経って、翌年の四月になった時、正成はふたたび活動をはじめ、わずか五百の兵を以て、まず赤坂の城を攻

め、城将湯浅定仏を降し、その兵を合わせて二千となし、住吉天王寺辺へ打って出で、渡辺橋の南に陣を敷いた。

両六波羅探題の周章狼狽は、外目(よそめ)にも笑止の程であって、隅田(すみた)通治、高橋宗康、この両将に五千の兵を付け、急遽討伐に向わせた。

そこで正成は二千の精兵を、まず三つの隊に分かち、天王寺の付近にかくし伏せ、外に弱卒三百をして、橋を守らせ、機会を待った。

隅田、高橋はその弱卒を見て、大いに笑い突撃(とつげき)した。三百の卒は一散に逃げた。

それを追って、隅田、高橋の勢が、天王寺付近にさしかかった

時、伏兵が三方からあらわれた。

隅田、高橋の勢の狼狽すまいことか！

「詭計ぞ！」とばかり退き逃げたが、正成の勢に追い討たれ、或いは川に溺(おぼ)れて死に、全軍ことごとく意気沮喪し、二将は京都へ引あげた。

そこで正成は悠々と、天王寺の地へ陣を敷き、京都へ攻めのぼるべき気勢を示した。

と、その時二度目の討手として、宇都宮治部大輔公綱が、向い来るという取沙汰が聞えて来た。

＊

七月××日の夜のことであった。正成の天王寺の陣営で、河内の国の住人和田孫三郎は、額の汗をふきふき、正成へ情勢を報知(しら)せていた。

「……そのような事情にござりまして、宇都宮公綱(うつのみやきんつな)　宿所(しゅくしょ)にも帰えらず、六波羅殿よりすぐに打ち立ち、主従わずかに十五騎にて、天王寺へ向いましてござりまするが、洛中におりましたるところの兵(つわもの)ども、それと聞き伝え馳せ加わり、四塚作道に達しました頃には、五百余騎(よき)になりましてござりまする。その行動の果敢なる、権門であれ勢家であれ、路次にて一旦邂逅(かいこう)しますれば、乗馬を奪い、従者を役夫とし、躊躇するところござりませぬ。そ

のため旅人は路程を迂回(まわ)り、家々では扉(とぼそ)を閉じまするような有様。既に柱松(はしらもと)に陣を取り、明朝此方へ取りかからん構え、必死に見えましてござりまする」

三

「成程」と正成は聞き終ると、しばらくじっと考え込んだ。

「正遠」とややあって正成は、傍につつましく控えている、一族の和田五郎正遠へ微笑を含んで声をかけた。「意見あろう申してみい」

「は」と云うと正遠は、ユサリと一膝すすめたが、「先般隅田、

高橋の勢の、五千余騎をさえ渡辺の橋にて、追い崩しましてござりまする。かかる我君の手腕(てなみ)にも恐れず、公綱(きんつな)わずか七百余騎にて二千余騎のわが軍に向うというは、先般の負戦に負腹たて、無二無三に仕掛くるものと存じまする。謂わば暴虎馮河(ぼうこひょうが)の勇、何程のことがござりましょう。それに反しましてお味方の勢は、勝に乗りまして意気軒昂、然らば今夜逆寄(さかよ)せ仕り、一挙に追い散らしあそばすこそ、肝要かと愚考いたされまする」。「一理はある」と、正成は云った。「が、それでは味方も損ずるよ」

「……」

「合戦(かっせん)の勝敗と申すもの、必ずしも大勢小勢にはよらぬ。ただただ兵の志が、一になるかならぬかにある。……公綱が行動を案

ずるに、先般関東方我に破られ、面目を失して帰りし後、小勢にて向い来し志、生きて帰らぬ覚悟であろう。それに公綱は弓矢とっては、坂東一と称さるる人物。従う紀清両党の兵は、宇都宮累世養うところのもの、戦場に於て命を棄つること、塵埃の如く思いおる輩じゃ。その兵七百余騎志を合わせ、決死を以て当手に向わば、当手の兵大半は討たれるであろう。関東討伐、朝権恢復、この戦を以て決しはせぬ。行末遥の戦に多からぬ味方を失うては、取り返しならぬこととなろう。……正成、今宵陣を引く所存じゃ」

「ご退陣？」と、正遠も、孫三郎も、驚いたように眼を見張った。

「一戦もお交しあそばされずに？」

「一旦退(の)いてまた乗っ取るのじゃ」
「……」
「味方を傷つけず敵も傷つけぬためにな」
「……」
「公綱に恩を施すともいえる」
「……」
「宇都宮公綱は律義者じゃ。義に厚く情に脆(もろ)い。坂東武者の典型でもあろうよ。ただ不幸にして順逆(じゅんぎゃく)の道を誤り、今こそ朝家に弓引いておるが、一旦の恩に志を翻(ひるが)えし、皇家無二の忠臣として、尽瘁(じんすい)せぬとも限られぬ。……正成が為んよう見て居るがよいぞ」

暁近くなった時、正成の本陣をはじめとし、和田正遠、湯浅定仏、その他楠家一党の陣は、ひそかに粛々と伍をととのえ天王寺から引きあげた。

＊

一方宇都宮治部大輔公綱は、東の空の白むと見るや、七百余騎を引率し、天王寺さして蔦地（まつしぐら）に押し寄せ、古宇都（こうづ）の民家へ火をかけて、鬨（とき）の声をドッとあげた。

京都あまりに無勢とあって、両六波羅探題北條時益、同じく北條仲時によって、わざわざ関東から呼びよせられ、京都守護をま

かせられた、武功名誉の公綱であった。隅田、高橋の両武将が、もろくも正成のために渡辺の橋で破られ、関東の武威を失墜するや「大軍すでに利を失いました後、小勢を以て向いますること、如何あらんかとは存じまするが、関東を罷り出でまする際、このようなお大事に巡り合い、命を軽ういたすを以て、念願といたしおりましたる私、駆け向いまするでござりましょう。今の場合を観じまするに、戦いの勝敗そのものを、云為いたす時にてはござりませぬ。何はあれ一人にても駈け向い、落ちました関東の武威を揚げますこと、肝要のことかと存ぜられまする」と、こう言上して向って来た公綱であった。

決死の程が想像されよう。

さて、然うドッと鬨をあげた。

然るに答える者はなく、駈け出して来る兵もなく、楠氏の陣営には、焚きすてられた篝が、余燼を上げているばかりであった。

「正成一流のたばかりでもあろうぞ。油断して裏掻かるるな」

と、公綱は馬上大音に叫び、更に天王寺の東西の口より、三度までも駈入り駈入ったが、敵の姿は一人も見られなかった。

夜がまったく明け放れた。

事実敵影はないのであった。

多少の疑惑はあったものの、戦わざるに勝った心地がして、公綱としては歓喜類なく、正成の陣営のその後へ、自身直ちに陣を敷き、やがて京都へ早馬を立て勝利の旨を南六波羅へ申しやっ

た。

しかるに五六日経った頃から、奇怪なことが夜々に起った。

天王寺を遠く囲繞(いにょう)して、秋篠(あきしの)の郷や外山(とやま)の里や、生駒の嶽や志城津(しぎつ)の浜や、住吉や難波の浦々に――即ち大和、河内、紀伊の、山々谷々浦々に、篝(かがり)や松明がおびただしく焚かれ、今にも数千数万の軍勢が、寄せ来るかとばかり見えることであった。

「一旦陣は引いたが正成め、新手の大軍を猟(か)り催し、押し寄せ来る手段と見える。誠(まこと)の戦(たたかい)一度もせず、残念に思っていたところ、押し寄せ来るこそ却って幸い、迎え撃(う)って雌雄(しゆう)を決しようぞ。……やア汝等(おのれら)寸刻といえども、油断をするな、用意怠るな！」

こう部下に命を伝え、自己も鎧の上帯を解(と)かず、部下にも帯を

解かしめず、馬の鞍(くら)をも休めようとはせず、まして夜な夜なを眠らず眠らせず、敵の押し寄せ来るを待ちかまえた。

然るにその後も依然として、遠籌(とおかがり)は山々谷々に、また浦々に燃えつづいたが、寄せて来ようとはしなかった。

大将公綱を初めとし、紀清両党の郎党たちも、追々惰気(だき)を催して来、しかも思い切って心を許し、眠に入ることが出来なかったので、身心次第に疲労(つか)れ衰弱(おとろ)えて、戦意頓(とみ)に失われ、退陣したいものと思うようになった。

四

天王寺の陣を引いた正成は、数里はなれた櫨子原（しどみばら）に、幔幕（まんまく）ばかりの陣を張り、悠々と機をうかがっていた。

或夜正遠（まさとお）と定仏（じょうぶつ）とをつれ、陣々をひそかに見回りながら小高い丘の頂まで来た。

はるかの彼方に天王寺があって、その辺に敷いてある公綱（きんつな）の陣から、立ちのぼる篝の火が空に映じ、ほの明るさを見せていたが、いつもの夜よりも火光は弱く、衰えの様が感じられた。

「正遠」

と、正成は愉快そうに云った。

「明日は天王寺へ帰ることが出来るぞ」

「は？」

と、正遠はいぶかしそうに、
「では明日わが君には、天王寺をお討ちあそばすので？」
「いや公綱とは戦いはせぬよ。これは以前から決めていることじゃ」
「では如何して天王寺へ、明日お帰りあそばしますか？」
「公綱明朝陣を引き、京都へ帰って行くからじゃ」
「ははあ、公綱退陣しましょうか？」
「あの篝火の衰え様では、明日退陣と見てよかろう」
「……」
「一戦も交えず正成をして、退かせましてござりますと、これを功にして京に帰らば、公綱の面目は立つからのう」

「これは御意(ぎょい)にございます」
「公綱としてはわしを追い討ち、この陣を破りたく思ってはいようが、それにしては兵が少なすぎる。といって天王寺にとどまっているには、夜な夜な燃える数千の篝が、どうにも気になっておちついて居られぬ。で、結局、帰って行くのじゃ」
「さよう予(あらかじ)めご計画あそばして、天王寺をご退陣あそばしましたので？」
「そうだ」と正成は頷いた。「で、わしは百姓や漁夫や、樵夫(やまがつ)などに命を含め、山々谷々浦々に、あのように篝を焚かせたのじゃよ。……定仏定仏」と湯浅定仏を呼んだ。
「わしは赤坂を落ちる時にも、必ず後日奪回いたすと、こう決心

して落ちたのじゃよ」

「は」

と云ったが、湯浅定仏は、何んとない苦笑を頬に浮かべた。

「まこと君にはその後間もなく、赤坂城を復されましてござりまする」

「わしが火をかけて脱け出した城を、其方よく修理してくれたのう」

「……」

定仏は黙ってまた苦笑した。

それに相違ないからであった。

正成が赤坂城を捨てて出た後へ、六波羅の命で入城し、城を修

理して籠もったのは、たしかに湯浅定仏だったのであった。
が、その定仏は正成に攻められ、他愛なく城は乗っ取られ、本人はこのように降将として、正成に仕えているのであった。
苦笑せざるを得ないではないか。
「過去を探り現在を識り、未来を察して世を渡らば、人間間違いはないものじゃ」こう正成は訓(おし)えるように云った。
「武人にとっては合戦こそは、立派な世渡りの術だからのう。未来を察してかからねばならぬよ。……明日天王寺へ帰ったなら、何を置いてもお寺へ参り、未来記を拝見するつもりじゃ」
この夜も山々谷々に、そうして津々浦々一円に、正成の焚かせている篝火が、妖しく凄く燃えていた。

五

正成の予言は的中し、翌朝公綱は陣を撤し、京都をさして帰って行き、代(かわ)って正成が天王寺へ這入った。

元弘二年八月三日、この日はよく晴れた秋日和(あきびより)で、松林では鳩が啼き、天王寺の塔の甍(いらか)には、陽が銀箔のようにあたっていた。

白鞍(しろくら)置いた馬、白覆輪(しろふくりん)の太刀、それに鎧一領を副(そ)え、徒者数人に曳き持たせ、正成は天王寺へ参詣し、大般若経転読(だいはんにゃきょうてんどく)の布施として献じ、髯の白い老いた長老に会い、正成不肖の身をもって、一大事思い立ちたる事由を審(つぶ)さに述べたるのち、虔(つつ)まし

く居ずまいを正し、「承わりますれば、上宮太子厩戸皇子様、百王治天の安危を勘え、日本一州の未来記を認め、この寺院に秘蔵あそばさるるとか。もし拝見苦しからずば、現代に関わる箇所だけなりとも、是非とも拝見仕りたく、如何のものにござりましょうや？」

すると長老は深く頷いて、

「万代の秘書にはござりまするが、多門兵衛様には忠誠丹心、まことの武夫と存じますれば、別儀をもちまして、お眼にかけるでござりましょう」

と云い、一旦奥へはいったが、やがて金軸の書一巻を、恭しく捧げて現われた。

正成は悦び譬(たと)うるものなく、謹みかしこんで両手に受け、徐(おもむろ)に開いて読んで行った。

不思議の一連が眼にうつった。

「人王(じんおう)九十五代ニ当ツテ、天下一度(たび)乱レテ而テ主安(しゆやす)カラズ。此時東魚来(とうぎよきたり)テ四海ヲ呑ム。日(ひ)西天ニ没スルコト三百七十余箇日。西鳥来テ東魚ヲ食ウ。其後海内一ニ帰スルコト三年。獼猴(びこう)ノ如キ者天下ヲ掠(かす)ムルコト三十余年。大兇変ジテ一元ニ帰ス」

それはこういう文字であった。

正成は沈思(ちんし)した。

思いあたることが数々あった。

(後醍醐(ごだいご)の帝(みかど)こそは神武の帝より数えて、九十五代にあたらせ給

う。天下一度乱レテ主安カラズ。これは現代(いまのよ)の事なのであろう。東魚来テ四海ヲ呑ム。これは北條の、一族の悪逆(あくぎゃく)を指しているのであろう。西鳥来テ東魚ヲ食ウ。これは何者か関東を滅す。という予言に相違ない。日西天ニ没スとあるは、帝隠岐島(みかどおきのしま)へ御遷幸(せんこう)ましまされた、この一事を指しておられるのであろう。三百七十余日とあるからには、明年のその頃に都へ御還幸、御位に復されるやも計られぬ。……しかしそれにしてもその次に書かれた、獼猴(びこう)ノ如キモノ天下ヲ掠(かす)ムとは、一体どういう意味なのであろう？）

一抹の不安が正成の心に起った。

これは勿論足利尊氏(あしかがたかうじ)によって、天下を奪われることを予言

したところの、その一文であるのであったが、如何に聡明の正成にも、そこまでは思い及ばなかったのである。

（どうあろうと我に於て関わりはない）

すぐ正成は快然（かいぜん）とこう思った。

（帝の忠誠の臣として、帝の一個の衛士（えじ）として、尽くすべきことを尽くせばよい。ましてや太子のその後の予言に、大兇変ジテ一元ニ帰スと、こう記してあるではないか）

快然とした正成の謹厚の顔には、初秋の明るい陽の光が、障子越しにほのかに射していて、穏やかな陰影をつけていた。

間もなく正成は陣へ帰った。

正成の予想に狂いがなく、その後宇都宮公綱は、宮方に帰順し

て忠節を励んだ。

青空文庫情報

底本：「時代小説を読む　城之巻」大陸書房
　　1991（平成3）年1月10日初版
底本の親本：「天保綺談」桜木書房
　　1945（昭和20）年
初出：「日の出」
　　1935（昭和10）年6月
入力：阿和泉拓
校正：noriko saito
2008年5月15日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤坂城の謀略

国枝史郎

２０２０年　７月１３日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/